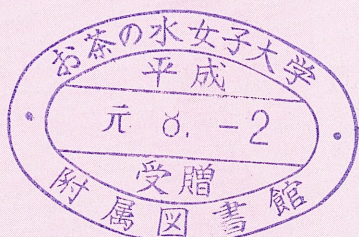


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1989 8



第88巻 第8号 日本幼稚園協会

これからの「子育て」



全日私幼主催の「21世紀をめざす子育て国際会議」の子育て小論文コンクール受賞作品集。

21世紀の子育てに関する小論文で母親、幼児教育関係者、教員、学者、ジャーナリストなどいろいろな立場からの子育てに関する意見をまとめています。日頃子育てに関して悩みをもつ母親や保育者などはもちろん幅広い子どもに関する勉強をしたい方々には大変参考になる子育て論、一家に一冊、一園に一冊をおいておきたい書です。

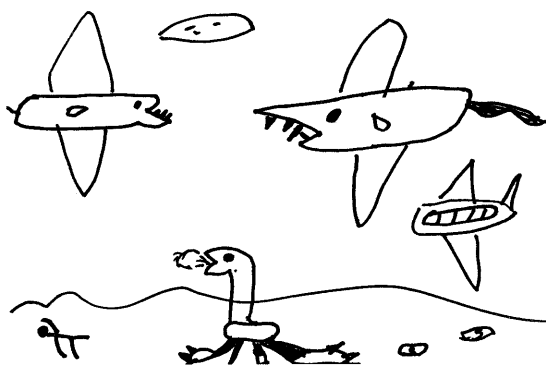
21世紀をめざす「子育て」について、
いろいろな立場からの提案を
まとめた書!

全日本私立幼稚園連合会編

B6変型判・264頁

定価1,200円(本体1,165円)

幼見の教育



第88卷 第8号

幼児の教育 目次

——第八十八卷 第八号——

© 1989

日本幼稚園協会

公正を求める子ども……………津守 真…(4)

特集・緑陰図書紹介

「子供の夕暮」……………三木 紀人…(8)

「先生と生徒の人間関係」……………飯長喜一郎…(12)

「1988／89日本子ども資料年鑑」他二冊……………村石 京…(15)

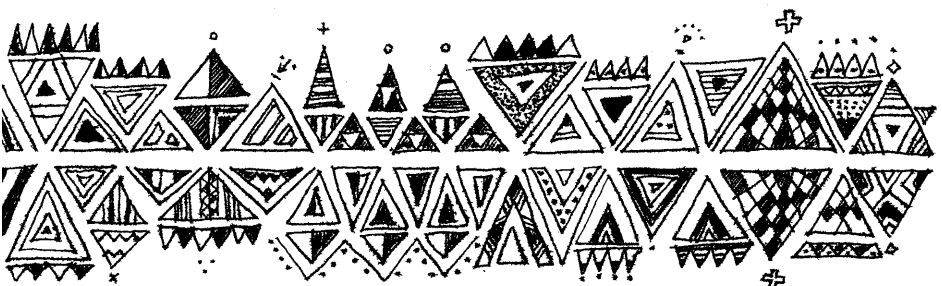
「人生の親戚」……………中村 弓子…(18)

「わたしのあさ」他一冊……………関 祐二…(22)

「大都会の小さな家―住の思想へ―」……………皆川美恵子…(25)

臨床の現場から

私の出会った人々(三)……………安島 智子…(28)



子どもの絵あれこれ(上)……………川崎 千束…(36)

ことばを生きる体験(二)

——意味の豊かさを求めて——……………浜口 順子…(42)

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(3)……………原口 純子…(50)

若いお母さんたちへ

自立——かかわりの中で——……………野島 順子…(56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

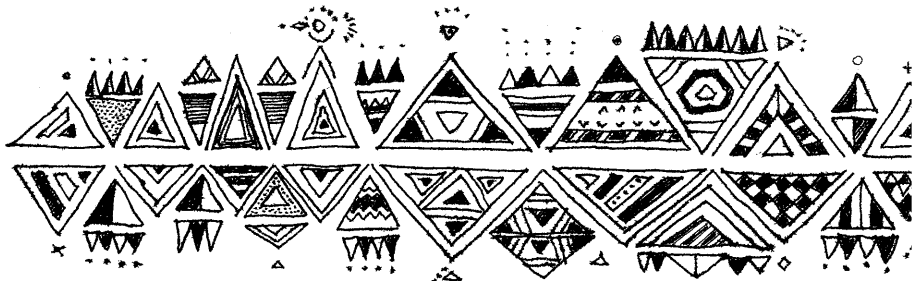
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



公正を求める子ども

津守 真

Sくんはことばを話さない。敏感な感受性を持ち、内心傷ついたり悩むことが多いが、自分から表現することが少ない。この四月以来、自分で動くことが多くなり、安心してみていられるようになってきた。

四月のある日、私と一しょに職員室にいったが、廊下にある温飯器の扉を開いて、いくつかの弁当の中からひとつを取り出した。私はそれがだれの弁当か分からず、他の人のだったらその人が可哀想だからと言って制したが、Sくんはそれを校長室の机の上まで持ってきてしまった。私は傍に腰をおろし、だれの弁当だろうとだめながら、この子どもの

好むはさみと折紙などを選んできた。Sくんは机の上に弁当をおいたまま、手をひざにおいてじっと坐っている。

通りかかった他の大人が、この模様の弁当包はだれのかきぎにいつてあげようと、担任にたずねてくれたところ、それはSくんの弁当だと判明した。私はSくんに申し訳ないことをしたと思った。

私ができることを分かり、あやまると、それまで弁当を机の上においたままだったSくんが、直ちに身体の表情をくずし、顔をほころばせて弁当を食べはじめた。この子どもは、ことばを話さないけれども、自分が不当に扱われたことを分かっていた。誤解がとけて、この子の心が晴れたとき、この子は活動しはじめた。ことばを話さないからといって、社会的公正さを欠いてはならないことを、私はこのとき悟った。

そのとき私も一緒に弁当を食べていたが、Sくんは自分のを食べ終わると、私の弁当を引き寄せて、残りを食べてしまった。この子が私の弁当を食べたのははじめてのことである。一度は憤慨したであろうSくんが、私に対して打ち解けてくれたことを私は感じた。

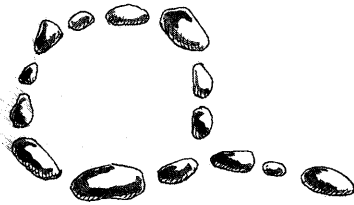
その日の午後、Sくんともうひとりの子どもが、一台のテープレコーダーを囲んで、「お母さんと一しよ」のテープをきいていた。もうひとりの子どもは同じ箇所を繰り返し返してききたいし、Sくんはそれが気に入らず、全曲通してききたい。二人のとり合いの間に

私は入ることになった。先刻のようなことがあった後であり、私はSくんが公正に扱われていると感じてほしかった。しかし、このような場合、大人の道徳規準をもち出して、順番にと言って済むことではない。もうひとりの子どもには、テープの同じ箇所を繰り返さなければいけない、この子の内心の危機がある。いろいろと試みた末に、私はもう一台テープレコーダーを探してきた。ところがもうひとりの子どもは二台あることが気に入らず、古い方のテープレコーダーを捨てにいつてしまった。話はまだつづくのだが、Sくんは、私がこうして二人に公平にするよう努力していることを認めてくれたらしい。それから数日、取り合いをしながらも、そのやりとりする活気をお互いにたのしんでいるように思える。

複数の子どもたちが一緒に生活する場で、それぞれの子どもへの訴えに耳を傾けるのは容易でないが、具体的な状況のひとつひとつにあたってそれをしてゆかないと、私共はいつのまにか大人に都合のよいように環境をつくりかえてしまう。そして子ども重大な権利を侵害して気付かなくなってしまうのが恐ろしい。子どもによっては、無言の反論をくり返してもきいてもらえない誤解が積み重ねられることがある。ぼくは一体どう生きたいのだろうという問いを発しつつ、次第に無表情になってゆく子どももいる。

今年は、ユネスコの子どもの権利宣言の修正案が批准される年である。子どもたちは、社会で、人間として公正に扱われる権利をもっている。学校や施設は、それを侵す危険をいつもかかえている。子どもの内心の訴えがきかれているかどうか、子どもの選択の自由のある空間と時間が備えられているかどうか、私共は常に問い直してゆかねばならない。

(愛育養護学校)



加藤八千代 著

『子供の夕暮』

(中村書店刊 昭34・11)

三木 紀人

本書を紹介する資格が自分にあるのかどうかを疑いつつ、ともかく書いている。何しろ私はこの本を所持してさえおらず、某図書館蔵本を写したものでまにあわせている始末なのである。

といっても、私が格別怠慢なわけではなからう。

『子供の夕暮』はごく小部数出され、主として知己などに配られたものらしく、出版元に一部もないとのことであるし(電話照会による)、古書店めぐりを日常とする私も、店頭でこれに接したことがない。それほどの稀購本である。また、加藤氏についても、この詩集の著者ということ以外に情報がなく、多少とも詩にかかわる文献のあれこれをひもといても手掛りらしきものがなかなか得られないままになっている。

そんな私がたまたま書名を知ったのは、刊行十一年後（それも、今から二十年近い昔となった）の岩波書店刊『図書』一九七〇年三月号所載の茨木の子氏「美しい言葉とは」という文章によってである。その中で茨木氏は、本書の「あとがき」の、題名にかかわる

大人とは 子供の夕暮ではないのか

という一節を引き、「この一行は、折にふれて、この十年あまりひとつのメロディのように私のなかで鳴る。」と書いている。共感させられる指摘であるが、私一個について言うならば（茨木氏の場合もそうなのかもしれないが）、「メロディのように」鳴るのは、取められた詩のほとんどであって、何かのおりにそのひとふしが心の中でよみがえるのである。

例えば、冒頭の詩は

縄とび

こちらから あちらへと
跳びこえては みたけれど

たった それだけ

というもので、詩自体「たった それだけ」と言い
たくなるような短かさであるが、縄とびをしていて
無事に跳べたおりにふと心をかすめるささやかなと
まどいを伝えて印象深い。人生には、何かにいどん
でそれを果たしたとき、なぜかあるむなしさを覚え
ることが少なくないものであるが、そんなときにこ
の詩を口ずさむと味わいはひとしおであろう。

以下、この詩には次のような題の詩が並ぶ。

だるまさん あやとり 雪だるま かくれんぼ
おはじき ほおずき かけっこ 石ころ 影
ふみ ボート遊び 戦争ごっこ ピエロ おと

し穴 のぞき眼鏡 知恵の輪 絵本 風船 汽
車ごっこ 凧 鬼ごっこ 花摘み 雪なげ 陣

とりごっこ 砂あそび 陽なたぼっこ 御手玉

独り遊び 石けり 江り台

取り上げられた主題はおおむね子供の遊びであるが、それをほほえましいものとして、余裕ある大人の眼でとらえるのではなく、人生の本質的部分をすでに通過してしまった立場から、喪失感とともに追想している。作者のこうした立場とそれへの思いは、「あとがき」の

わたしたちは 子供の頃に 大人になってす
ることしなければならぬことを 遊びのなか
で すでにしつくしていたのではないだろう
か。そうとも知らない私は ついとかうかと大
人になってしまった。なにやらペテンにかかっ
たような気がしないでもない。

に示されている。前記「大人とは……」の文は、このあと一行分の空白をはさんで記されているのであ

るが、その行間に秘められた思いの深さがしのばれる。

子供の頃の遊びの中に人生のすべてがあるとは、言いすぎのようでもあり、また、似たことが古来よ



く言われてきたようでもある。近年各方面からにぎにぎしく行なわれている遊びへの考察を思いおこすと、この「あとがき」自体の存在感はやや弱くなるかもしれない。しかし、人生の断面や深層を遊びの情景の中にさりげなく映す各詩篇の交響効果の中に、あらためて「あとがき」を置いて、再読三読するならば、何が見えてくるか。それをなお、たしかめていきたいと思っている。

迂り台

夜の斜面を

夕ぐれが迂ってゆく

長いながい影を曳いて――

誰が夕ぐれをとどめられよう

誰が夕ぐれをとらえられよう

末尾の詩である。遊びの時間が終わり、夕暮が不可避の力によってせまってくる。そのように、人は子供から大人に移行して行くのである。遊びに堪能したならば、長くつづく「夕暮」から夜への時間もそれなりの充足感が期待できよう。が、十分遊べず、競争原理の支配する世界に早く招かれ（または追いこまれ）、いつのまにかなしくずしに「夕暮」の中にたたずんでいる昨今の子供たちの眼に、人生はどのように映ることであろうか。

（お茶の水女子大学）

ハイム・ギノット 著
久富節子 訳
『先生と生徒の人間関係』

(サイマル出版会)

飯長喜一郎

私自身の子育てに役立った本を紹介します。と言っても、私に役立った本は、同じ著者の『親と子の心理学』です。『先生と生徒の人間関係』は、その先生判であり、同じ考え方で書かれています。二十数カ国語に翻訳されています。

本書に、若い先生の次のような言葉が紹介されています。

「ぼくは子どもが何を必要としているか、もう知っていますよ。暗誦できるほどです。子どもは教師に受け入れられ、尊敬され、好かれ、信用されなくてはならない。勇気づけられ、元気づけられ、活動的なことをさせてもらい、楽しませてもらわなければならない。それから探求し、実験し、行動に移せるように導いてもらわなければならない。ああ、くそくらえだ！あまりに多くを望みすぎるんですよ。ぼくに欠けているものは、ソロモンの知恵とフロイトの洞察力と、アインシュタインの知識とフロレンス・ナイチンゲールの奉仕精神なんですよ。」

教育や保育にたずさわるひとは、多かれ少なかれこのように嘆いたことがあるのではないでしょう。か。良い教育、良い保育とは何であるか知っている。しかし、それは一体どうしたら可能なのだろうか。日常の活動の中で、目の前の一人ひとりの子どもたちにどうすることなのだろうか。

それが分からないから苦労しているのに、答えてくれる本はなかなかないものです。

この本は答えてくれます。

著者ギノットは、カウンセリングや心理療法の専門家です。ということは、人間一人ひとりが、自分自分の問題に立ち向かい、解決して行けるようになるために、どう援助したら良いかを考え実践する人です。そしてここには、その考えを教師と子どもたちとの関係に応用したらどのようなことになるかが、描かれています。

「七歳のルディが急に泣き出した。先生は彼に近寄

って、こう言った。『何かあったのね』

ルディはこっくりうなずくと、新しいおもちゃの自動車を指さしながら、『車輪がとれちゃったの。』

ジュリオがやったんだ』と叫んだ。『わざとじゃないよ』。ジュリオが、こうたたみかけた。

『これは新しい自動車なんですよ、ルディ』。先生は心配顔でこう言った。

『うん』とルディ。

『そう、大変なことになっちゃったわねえ』

ルディは泣きやみ、二、三分黙ったままでしたが、こう切り出した。

『そうだ。家にまだ他の車があるんだ』

危機は去った。簡潔で明確な同情を与えることがどんなに力となり得るか、このできごとが物語っている。……」

どうです。わかりやすいでしょう？一冊の本全体がこのようなシナリオで成り立っているのです。

こういう本は、えてして安っぽくなってしまいがちです。しかし、本書は読み進むに連れてギノットの人間に対する暖かい信頼感が感じられて来ます。そして、一見ハウツー本なのに、そのような人間への信頼感が読み手にも持てるような感じがして来ます。

どういふ言葉が子どもたちを傷つけるか、という例もたくさん生々しく描かれ、私なども身につまされる思いをしたものです。

ギノットの描く良い対応の基本のひとつは、相手の気持ちを（それがたとえ不道德だったとしても）しっかり受け止めること、そして、受け止めているということを相手に工夫しながら伝えることと云えるでしょう。……と書いてみて、やはりこういう抽象的な言い方ではダメだなと思います。（苦笑）

ともかく、この本は子どもたちとの付き合い方のヒントの宝庫です。最近の本ではないし（原著は一九七二年刊）、描かれる例は小、中学生がほとんど

ですが、役に立つこと、子どもたちに会う元気が出ることうけあいです。木陰で読んでホノボノしてきます。

内容が多いので、章題をあげておきます。

- 一 「教師は何に悩んでいるか」
- 二 「よい教室の条件」
- 三 「わるい教室の条件」
- 四 「子どもの信頼を得る方法」
- 五 「ほめ言葉の危険性」
- 六 「効果的なしつけの方法」
- 七 「子どもと教師が衝突したとき」
- 八 「子どもの自主性を育てる」
- 九 「学習への動機づけ」
- 十 「学習方法を変える」
- 十一 「よい教育環境をつくる基礎」
- 十二 「教師は子どもの人生をつくる」

（お茶の水女子大学）

日本総合愛育研究所

『1988／89 日本子ども資料年鑑』

(中央出版)

藤井チズ子 著

『すてきなおかあさん学』

(学陽書房)

花形 恵子 著

『ことば美人は暮らし上手』

(六興出版)

村石 京

「1988／89 日本子ども資料年鑑」

子どもとかわる仕事をしている者にとって、大切なのは子どもを深く見る、そして広く正しく見ることです。そのためには個人の主観やものの考え方だけに留まらないで、子どもに関することを多面的に知ることも必要です。

子どもに関することといえば、その身体的発達面、あるいは精神的発達面、そして子どもを取りまく環境等多くのことがあげられます。社会環境、家庭環境、教育環境、あるいは医療や福祉の面などもあります。そしてこれらにたずさわる仕事をしたり、研究したり、学んだりしている者達は、しっかりと資料が必要なことがあります。これは勿論現場の教師にとっても同じであって、今日の前にいる子どもを考えるときも、現代の子どもの生活環境や総合的発達に目を向け、偏りのない広い視点から子どものことを考えていくことが大切であることはいうまでもありません。

このように考えると、この度、社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所から発刊された「1988 / 89 日本子ども資料年鑑」は私どもにも多くのことを教えてくれるよいマニュアルといえます。

例えば、家族構成と家族形態の中の「世帯の種類と規模」の欄一つを見ても、昭和35年から昭和60年までの推移の中で数字の中からは種々なことを読みとることが出来ます。また、家族の生活と意識における「家族と子ども」の中の母親の年令別にみた子どもに対する価値観や、子どものしつけ方の責任についての表等を見ていると、年代による子どもに対する母親の意識などが読みとれます。

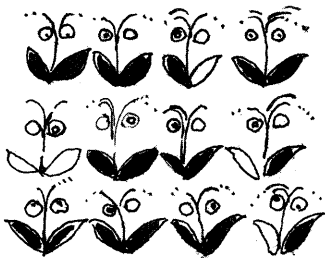
資料ですから全体に図表が多いのですが、数字や表はどれも苦手などといわずに見ていると、実に種々な内容が載っているのです、子どもにかかわる社会問題、家庭問題、経済問題など多くのことがわかります。子どもに関するあらゆる分野の資料が内容豊富にまとめられてあるので、子どもの関係の仕事や

研究をしている者にとっては、貴重な資料年鑑であるといえましょう。

「すてきなおかあさん学」

「ことは美人は暮らし上手」

どちらも新しく出版された本です。ここに二冊並べてとりあげたのは、私が個人的に知っている方と
いうだけでなく、どちらも母親としての体験から学



んだことがこの本の中に盛り込まれていて、かつ、現在の夫々の仕事の面に活かされていると感じたからです。

先ず著者について簡単に御紹介してみましよう。

藤井チズ子さんはお茶の水女子大学児童学科の卒業生で、NHKの「おかあさんの勉強室」や「市民大学」といった教育番組を長く担当されて、現在はNHK教育番組センター・生涯教育部チーフディレクターとして活躍している方です。花形恵子さんは劇団ぶどうの会で、山本安英氏等に師事して「語り」についての基礎を学び、現在はラジオやテレビに出演するかたわら、夫君篠原大作氏とともに詩を演ずる試み「言葉の散歩道の会」の公演を続け、「詩とあそびましよう」「おはなしあそび」などを行って、その反響も大きいと聞いています。そして二人に共通していることは、仕事を長年続けてこられた女性ということだけでなく、主婦として母親として家庭を大切にし、子どもを大事に育てながら、子ど

もからもいろいろなことを学び、子どもと共に自分自身が豊かになっている姿があることです。

藤井さんは、NHKの取材や多くの機会の中から、母親の役割、母親の姿、ものの考え方、家庭のあり方の大切さ、子どもへの影響力の大きさを、たくさんの例と彼女自身の考え方を合わせて述べていきます。文章の中に体験を通して学んだ多くの事柄があり、読む者に改めて母親の与える子どもへの大きい力というものについて考えさせられます。「子どもが順調に育つには暖かい親子関係が基本になる」と藤井さんは述べています。そして自分の子育ての経験が、番組の企画や取材にもつながり、その番組を通して知り得た子どもの発達や教育についてのこととか、多くの人々との出会いや体験が綴られています。番組の中には出しつくせなかったものや、映像には残しえなかったものが、本の中に書き現してあります。

花形さんは自分の子育ての体験を通して、絵本や

ことばによる親子のスキミングの中で、大切な多くのものが育つことを書いています。私どもはともするとせわしい毎日の生活に追われ、一日一日をクリアするのが精一ぱいという日常を過ごしていて、大事なことや、そのときでなければ再びこないものを片すみに押しやったり、なおざりにしたりしてしまいがちです。どんなに忙しかったとしても多忙と

いう口実を被ってはいはならないし、細やかな心を失ってはならないと思います。小さなことに気づく豊かな感性をもった人間でありたい、そして美しい言葉で語りあえる人間でありたいと、優しい詩を読み、「詩」を大切にすることを心につれて改めて思うのでした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

大江健三郎 著

『人生の親戚』

(新潮社)

中村 弓子

数年前に私は、この同じ緑蔭図書紹介で、やはり同じ大江健三郎の『新しき人よめざめよ』を紹介した。

この本の主題は、「知恵とともに住んでいる」ともいふべき真の無垢フシエシキを持つ、著者の障害児の長男イーヨーと著者の二十年間の共生の意味をブレイクの子言詩コトコトによって読み取ってゆくこと、そして同時にそのイーヨーをめぐる状況を通して過去二十年間の日本の思想的状況を回顧すること、であった。

そして、最終章「新しき人よめざめよ」に展開する終末論的ヴィジョンにおいて、著者はイーヨーとの共生の究極に、核の時代を通りぬけたその先に、死と復活を可能にする「罪のゆるし」の恩寵のようなものを予感する、と述べていた。

だが、この本で著者がイーヨーとの共生の意味を読み取るために訴えていたのは、終始、ブレイクにおける神そのものではなく、神から派生する宇宙論

的な力をあらかず神人たちの神話的世界であった。そこで、この最終章の恩寵の予感はいったどこにつながっていくものか、「この点は本書において興味深い未知数の要素として残っている。」と私は書いた。

さて本書『人生の親戚』には、まさにその「未知数の要素」が、一種の強烈な光のもとに展開している。

この小説の主人公は著者の友人であり、著者の長男と同じ養護学校に通う障害児を持つ、倉木まり恵という母親であるが、小説全体の出発点にあるのは、交通事故で下半身麻痺した小学生の弟が、その障害児の中学生の兄を誘って、車椅子を押してもらい、二人で伊豆の海の切りたつ崖まで自殺行をする、という信じ難く酷むじい事件である。

『新しき人よめざめよ』は「無垢」をテーマとしていたが、この小説は、中に引用されているイエー

ツの詩にあるように「無垢の祭が水中に消えさつた」ところから始まる。そして母親まり恵が、この過酷な事件の不幸（不幸とはまさに人生につきもの、すなわちスペイン人の言うところの「人生の親戚」である。）から立ち直ろうとする自己救済の歴史は、ちょうど『新しき人よめざめよ』におけるブレークの予言詩プロフェシーと同じように、バルザックの『村の司祭』の女主人公ヴェロニックの罪からの自己救済の歴史に重ねられ読み取られてゆく。しかし、その自己救済の歴史の根本的な原動力となっているのは、まり恵が英文学者として専門に研究している、アメリカのキリスト教作家フラナリー・オコナーの思想である。

オコナーは、すべての感知しえるもの（*sensible*）は、理解できるもの（*intelligible*）であると確信しており、その根底には、キリストがイエスとして受肉したことによって、時間を越えたものが、一時的な現世の肉体と一致したという贖い主

の受肉の秘儀ミステリがある。まり恵は、二人の子の死は酷たらしい感知しえるものだったけれども、とうてい理解しえるものではない、と言う。そして、感知しえるものとしての肉体の快楽による忘我の方向と、秘儀ミステリに触れることによって子供たちの死をも含めて世界を理解しえるもの、としようとする方向の間に、極端に揺れながら自己救済を探索してゆく。

彷徨の末、彼女は、一人の日系人実業家から、メキシコの教会付属の農場で、インディオや混血メティスの労働意欲を生み出させるための、シンボリックな人物としての役割を演じに来ることを依頼される。それは、大きな災難の犠牲を心にぎざんで、心の慰めを得るために労働に献身している母親という「聖女」の役割である。彼女はそれを引き受ける。そして演技にはじまったと見えたものを、真にせまる生死の舞台のぬきさしならぬふるまいにするために、癌が出現した……この農場での五年間に、彼女が世界を理解しえるものとして受容するに到ったのかどう

か、それはわからない。しかし、著者に送られると知っているヴィデオを撮るとき、彼女は骸骨のように痩せ衰えているがしみひとつない素裸の姿で、右手で不思議なVサインを示し、しかもある華やかさとともに微笑していた。おそらく……この姿は、最後の五年間に彼女がついに秘儀ミステリに出会って、世界と子供たちの死が了解できるものになったこと、そして裸の肉体も感知しうるものであると同時に了解できるものとして、永遠の世界の扉であることを示しているのではないだろうか。

主人公まり恵は聖書のマリヤ・マグダレナ、すなわち「聖女となった娼婦」のイメージに連なるものを持ち、じつに魅力的に描かれている。またそれは一言で表現するなら「過激な魂」であり、この小説は、彼女が幼年時代に落雷寸前のハルニレの木のかたわらで髪の毛まで感じた、という強い切迫感にも似たものに充たされており、やや「緑蔭図書」という雰囲気にはそぐわないかもしれない。しかしその

切迫感、著者がVサインのヴィデオに対して持つ恐怖と同じように「なにものかとの間の媒介をもくろんだ」ものを前にしたときの稀有の切迫感なのである。

(お茶の水女子大学)



『わたしのあさ』
『ゆみ子の絵日記』

(福武書店)

—— わたしのあさ ——

関 祐二

ば、このごろのH男は笑顔で過ごすことが多く、「ハイ、ハイ、」と言ってN先生の顔をしっかりと見、手を引っぱって「追いかけられごっこ」を要求したり、ホットケーキや焼きそばを作って食べたくてI先生を調理室に連れて行ったりする姿が見られるようになっていました。それまで深くかかわりのあった私からいつのまにか他の先生のところに関係が広がっていることに気づかされます。

そんなH男を見ていると、人とあそぶことや人のぬくもりを求めているように感じられ、なんともうれしくなります。ひとりで靴をいじっていたり、高いところを渡り歩いたりしていたころを思うと、人とのやりとりや情感のこもったつき合いが見られるようになったその成長ぶりに驚くほどです。

朝、スクールバスから降りるときに、にこにこ笑っていたのは、何かやりたくて心がはずみ、うれしくてうれしくてしかたがなかったからでしょう。

一日をこんな気持ではじめられたらどんなにしあ

ある朝のこと、「スクールバスから降りるとき、H男はにこにこ笑っていて、ほんとうにいい顔をしていたよ」とS先生から言われました。そういえ

わせなことでしょう。いや、どの子もこんな気持ちでスタートできるような学校にしておきたい……。

ここに二冊の絵本があります。『わたしのあさ』

『ゆみ子の絵日記』です。脳性麻痺から筋肉の緊張と痛みを受ける日々の中で、家族との交流、楽しい思い出などを語るゆみ子さんの日記です。このゆみ子さんの言葉をお母さんが書きとり、絵をそえて作り上げたものがこの絵本です。『わたしのあさ』はこんな文ではじまります。

わたしは、テレビを じぶんでつけられるようになつたのだから、朝のしょくじぐらい なんとかじぶんで たべられるようになりたいと おもっていました。そして、とうとう おもっていたとおり、朝はパンを、それからソーセージなどを、じぶんで たべられるようになりましただ。いままでは、ぜんぶたべさせて もらっていたので、じぶんで たべられるようになって、すっか

り生活が かわつたのです。

わたしの朝が、あたらしくなりました。

「わたしの朝があたらしくなりました」という言葉、なんてすてきな言葉でしょう。生きている喜びが、平凡な日々の流れのなかにいっぱいあふれていて……。

自分の朝をこんなふうに受けとめられ、感じられるゆみ子さんはすばらしい。この絵本には、小さなものにも感動する素直な心を持ったゆみ子さんの明るい言葉が光っていて、お母さんの暖かく、優しい絵と共に深く心に残ります。

お母さんがゆみ子さんの文章に絵をかくようになったときのことをこう書いています。

神奈川県リハビリテーションセンターの言語教室に通っていたころ、ゆみ子は脚がひどく痛んで、車椅子にも長く坐って居られない状態でしたし、

夜を過ごすのも大変でした。ゆみ子はそんな中で日記を口述し、言葉は話したとおりを写しとるだけでいつも仕上がった文章になっていました。それに私は葉書一枚ほどの絵をかいていったのです。私はゆみ子のために絵をかくという、思いがけない楽しい時間を持つことが出来るようになって、毎日が次第に明るくなってきました。

ゆみ子さんとお母さんとの情感のこもった言葉と絵を通したつながりは、しっかりした親子の絆を感じさせます。ゆみ子さんは言葉を通してなんとか自分の内面を出そうとしていますし、お母さんは、ゆみ子さんの心をとらえ、絵を通してその心の世界を表現しようとしています。子と母が言葉と絵でひとつになり、お互いに響き合う共感の世界を生み出しています。「思いがけない楽しい時間」がふたりのあいだに漂っていて、なごやかな雰囲気にはたせられます。

言葉のない子どもたちも何らかのかたちで自分の内面を伝えようとしています。しぐさで、表情で、目で、声で……。どの子もいろいろなことを感じ、それを外に表そうとしています。しかし、障害のためにその感じたことを外に出せない子どもいます。

子どもと共に生きる私たちの仕事は、子どもたちが心の内にあるものをわーっと出せるようにすることです。のびやかに表現できるように援助することです。そのために、いろいろな先入見にもとらわれず自由でいて、ゆみ子さんのお母さんのように素直でしなやかな感性を持ちつづけたいと思います。

そして毎朝、子どもたちの内にあるものが今にもわーっと出てきそうなそんな朝を迎えたいものです。ひとりひとり「わたしのあざ」があたらしくなるように。

(長野養護学校)

安原 喜秀
武者小路規子 著

『大都會の小さな家』

——住の思想へ——

(筑摩書房 昭・63年)

皆川 美恵子

この頃、はたと気づいたのだが、小説にしろ、絵画や映画にしろ、私が感銘を受けて愛おしく思い続けている作品には、「住み家」が、ある重々しきをもつて描かれているようなのである。アンドリュウ・ワイエスの絵で、窓辺に貝殻が並び、海水箱の置かれた「彼女の部屋」。往年の映画「心の旅路」の、スミスィとローラが新婚生活を始めた家。最近、話題となった映画「八月の鯨」で、海を眺めやる岬の老女の家。辻邦生の小説『廻廊にて』の、感性の魅力を湛えた少女アンドレの住む館。サン・テグジュベリの『人間の土地』の地球という棲み家。などなど。

私は特別、家に興味など抱いたことはないのだが、ここ一、二年、自分の住み家の居心地が悪くなり、生きる意欲も減退して、意気銷沈していく自分の姿を発見して、あらためて、私にとって、住み家がかげがえのないものであることを知った。そして、思えば、私に深い飲びを与えてくれた作品に

は、住み家が何らかの形で大切に描かれていたことをしみじみと感じたのであった。このことは、住み家から、やがて自分という身心が宿る容器が、どんな思いを湛えるにふさわしいかを、私にひそやかに知らせてくれる重大な手がかりになったように思う。

さて、家のことで苦しんでいた時、一冊の本を手にした。『大都会の小さな家』という本であった。

つつましやかな、目立たない本であった。私は副題の「住の思想へ」を目にしなかったら、手にとらず、やりすごしていただろう。なにしろその頃、住まいについて自分なりの考えを出さなくてはならないと思いつめていたから、副題が気になった。

この本はそれでも、「思想」などという堅苦しいことが詰まっただけではなかった。魅力的な住み方を希求する人々の溢れる「思い」、その「思い」を、多くの書物をあたることによってアプローチしていた。日本や外国、昔や今のさまざまな人々が、住ま

いへと寄せた思いが小説や随筆その他によって、たつぷりと紹介されており、それらの作品の引用によって「思い」は鮮やかに組み上っていく。読後、私は、その「思い」の柔らかな組み立てに満足した。

印象深い部分を紹介してみよう。近代合理主義建築を目指した鬼才ル・コルビュジェは、両親に捧げられるべく、安らぎの老後の家「小さな家」を設計し、建築する。ル・コルビュジェは、まず完璧な設計図を作り上げ、その家に適した敷地を見つけるための旅へ出た。そしてアルプスの山々を臨むレマン湖畔に捜し出し、自然環境を支配下に置いて、建築家の意図を完成させていく。しかし、自然はしたたかに、この「小さな家」に攻撃をしかけてきた。まずは樹木が成長し、家の基礎や日当りに影響を及ぼすところとなる。「プランは絶対的な主権をもつ」と信じているル・コルビュジェは、樹々を切り倒していく。気候風土に合った、その土地の自然に融けこむ住まいのたたずまいなど、眼中にないのである。

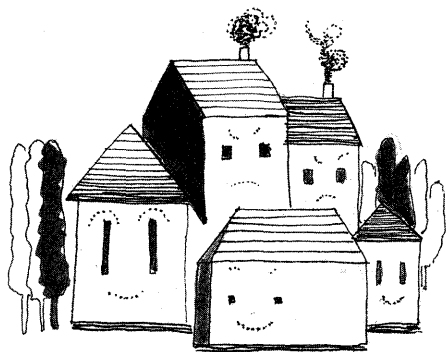
プランと自然の攻防の経緯は、「小さな家」をめぐる、ドラマティカルに綾なされていく。

この本には他にもたくさん家が登場する。たとえば、ピカソの過去を保存している「もう一つの家」。坂口安吾の無頼性を挑発した家。堀辰雄のルケを夢みる山荘。佐多稲子の出生の秘密を知っている生家。森鷗外が娘茉莉を育んだ夢の家。宇野千代の人生を綴る住居遍歴。そして、私にはこの本の圧巻とも思える、マルグリット・デュラスの女の住み家。著者は、デュラスの住み家にゆきつくべく、多くの家々をめぐるにきたようにさえ感ずる。

女の身体を、つまりは女の住み家を、世の中のあるもの宿らせる、共鳴の容器として輝かせ、その「反響室」を多声的な音楽の玄室とするデュラス。彼女自らが監督して映画化した作品群は、そういう女の館から響きわたる音楽に満ちているという。私はその音楽が聴きたくて『インディア・ソング』の映画ビデオを捜し出した。そして私がそこに

聴いたのは、身心を包む女体という、創つくの形こそが美しい容器が、やさしくうち震える折まげに発する音色だったように思われてならない。

(十文字学園女子短期大学)



私の出会った人々 (三)

安島 智子

◇対人恐怖的な症状に悩み、本当の自分を求めた青年期の女性◇

△対人関係場面の不安や緊張が動機となって来談された26歳の女性、摘子さん（仮名）のこと▽

―問題の提示・本当の自分を求めることを―

摘子さんとの最初の出会いは、その雰囲気の暗さと眼差しのきつさを印象的に感じた。何かつまらなさそうで、小さな花柄のワンピースという少女っぽい服装が、その雰囲気とアンバランスであったことも印象的であった。

本人が問題として語ったことは、「自分が出せない」、
「出せば陰口を叩かれるのではないか」と不安になり、
緊張するということであった。またミスが多く、「仕事
がうまくできない」し、他人と比較すると特別おかしく
感じているようであった。さらに、「人間としての自信
がない」と語られた。この発言には問題の本質を感じ、

その理由を尋ねてみたところ、彼女は「自分らしく生きていけないからだと思う」と答えたのだった。そして「自分らしさを見つけていきたい」と語った。

摘子さんは26歳の電話交換手、高校卒業後山口から家族といっしょに上京して就職。中学生の頃から歌手志望で、その夢を捨てられずに歌謡学院に通っている。母親は養女にもらわれて育ち、父親はそこに婿養子に入った。本人も3歳の時、遠い親戚の家に養女に行き、6歳の時に戻っている。兄が一人、姉が三人でみな独身。本人は末子である。

三回目のセッションでは、21〜23歳の頃、「生きていてもしょうがない」と思っていたのに、チャー（ロック歌手）に会って「生きていてよかった」と思えたことが話された。また思春期には「いい子ちゃんて、親に反抗することもできなかった」し、ずっと「姉たちのいいようにされてきた」と悔しそうに話し、「自分の意志で自

分の人生を切り開きたい。とその気持を語った。この気持は四回にも引き継がれ、「花嫁になった夢を解消しなければ」と、半年前に見た夢の話をする。

夢…多分お見合いをしたのだろう。結婚式で白無垢を着ている。相手の人に対しては、好きとも何とも思っていないかった。結婚したくない人だったのに、断りきれずに、周りからいように言いくるめられて、いつのまにか結婚させられてしまう。

「これが私の一番の問題」、「目がさめて夢で本当によかった」と思った。そうならないように「自分をしっかり持っていかなければ」、「本当にやりたいことは何か」、「本当の自分はどうか」、「本当の自分の人生は」、「これは考えましたねー」

来談動機となった対人関係場面での緊張や不安状態と、「本当の自分は？」と投げかけてくる疑問は、まさに対人恐怖状態を語っているもので、彼女もやはり、「個の未確立のために漠然とした後めたさに振りまわされるままにとどまっている」一人であったものと思われ

る。成長のどのレベルでの障害が、この「遅ればせの思春期」の病をもたらしたかは人によって差異があり、体験してきた人生の違いがあるにしても、この後の摘子さんの仕事は、「関係の複数化の中での個の確立」ということになっていくであろうと想像された。

―「落ち込み」の時期―

この時期、本人の表現では落ち込むことが続いた。これは自分自身を改めて方向付けるための引き籠りにもなう抑うつ状態と捉えられ、また一体感を求める願いが表現された時期でもあった。

第五回では、「幸せだなあと感じるのは音楽と溶け合った時」と語られ、私には摘子さんにとって音楽は一体感をもたらすものとして理解された。第七回では、高校時代の友人で人に好かれる人の話をし、「人と結びつきたい」気持が語られた。音楽にもそれを求め、「自分と客席が一体になって溶けあい、心がひとつになったという感じが一番素晴らしい」と語り、音楽以外の時間は落

ち込んでいる時間が長いとのことであった。

しばらくこの状態が続き、「なにもしたくない」日や「涙が出て何も手につかない」日もあったが、その終り頃、電話セールスの友子さんを知り合うこととなった。何か大事な人が登場したと思われた。

―姉のこと・母のこと・自分のこと―

第九回で姉と旅行に行った先でのことが話された。姉は知らない人とも話ができるのに自分にはそれができず、その場では「いらぬ人間のように感じた」、「自分の感情を出さない体の仕組みができてい」と絞り出すように話す。姉との旅行がきっかけになったのである。さらに「姉のお下がりが着て着められても、自分を誉められているのではない」と、『お下がりを着ていては、自分であるとは思えない』摘子さんの心情が語られた。

これらの話からこの家族の中の姉妹関係と摘子さんのおかれた立場、そしてその立場での摘子さんの気持ちが

私には痛いほど伝わってきた。

十一回には、三人でいると「二人が私より仲良くなつてしまうのではないか」という思いにいつもとりつかれてしまうと、三人場面での問題をとりあげたり、母親のことが初めて話された。

母親については、「あまり好きでない」と言いながら、また同時に「私は薄情だ。冷血人間で母のことをあまり思っていない」と母親に対する自分の気持ちを責めるかのように罪悪感に苦しむ姿も見せる。こういう気持ちが揺れ動きながらやはり、「母はわがままで折れることがない」、「父は養子で娘の私より力がないから、家の中では思い通りになると思っている」(母はまた、家の中では自由にふるまうが、外に出ると全く人間関係をつくれぬ)と、父親の弱さと母親の身勝手な言動に対する怒りの気持を現した。そして最後に「私は母親を本能的に許せない」と言ったのだった。

—自分について・母親の愛情—

十一回のセクションの後、摘子さんの捉える自分の見方が、ゆっくりではあるが変化が感じられるようになってきた。

十二回では、「自分は発展途上人だ」と語り、そういう自分を受け入れ、発展可能な自分を見ている余裕が感じられ、また「100%頑張ろうから80%頑張ろうに変わってきた」ということだった。

そのしばらく後には、「気のきいた会話をしたい」と思って沈黙が続いてしまう自分の状態を、「このコーヒーおいしいね」と何げなく言えない状態だと、自分の感じをつかんでいるなあと思われる発言がなされたり、「前はみんなといっしょじゃないと不安だった」から、「他の人と好みが違うのはへんじゃなか」と思っていたけれど、「自分のそういうところが好きになってきた」と話す。

みんなといっしょにいる場面でも、どこか自分らしくいることができてきたのだらう。

十五回には初めて、自分の好みの男性像を語った。こ

れまで父親や兄のことを話すこともなく、むろんボーイフレンドもいなかった摘子さんには画期的なことと思われた。また自分自身の理想像は、「大人のいい女」と語った。一方、電話セールの友子さんに対し、「友子さんは一個の人間として私を気にってくれた」と思えたとし、初めて人に「会いたい、友達になりたい」という気持ちで電話をかけることができたと言う。

摘子さんに大きなことが起きていることが察せられた。

同じ日である。大江千里が「幸せを感じる心が大切だ」と言っていたけれど、「あの一」とおずおずと話しはじめた。

家に帰った朝、寝ている私の耳元に、姉が母に言っている声が聞こえてきた。「摘子さん、もうそろそろ起こしたらいいんじゃない」と。それに対し、母は「摘子さんは夜勤しているんだから、ゆっくり寝かせてあげなさい」と言ってくれている。「その時初めてすごく母親の愛情を感じたんです」と、突然摘子さんの目に涙がこみ

上げてきた。「こういうことは今までも何回もあったけれど、母親の愛情を感じたのは初めてなんです。」

大江千里ならずとも、「母親の愛情を感じる心が大切」と言いたい気がしてくる。彼女の「内なる母親」の変容が起きてきていることがまた同時に「内なる子ども」の変容が想像され、治療者である私との関係のありようも確認できた気がした。

溢れ出る涙に当惑しながら摘子さんは話し続けた。

「養女に貰われて行った自分が本当の自分と思っていたけれど、「あれは過去の自分」、「今の母親から育てられた今の自分」を認め、愛せるようになりたい。「母によって、現在の自分が認められ、本当の自分が見えた」ような感じがする。「母に愛されている」と泣きじやくり、「初めて母を愛していると思った」と涙が止まらない。

私は、ただただ「よかった」と思い、じーっとそばにいた。

—自分自身—

十七日には、「母に認められた自分を膨らませていく」ことが「自分を認められるようになっていく」ことだと思ふ。「自分がわかってくる」と、「人のことがわかってくる」のではないか、そうすると「自分は自分」と思ふと語る。

また友人とその妹の三人でスキーに行ったことが話され、その妹さんに「存在感がある、ゆったりしている」と言われたと嬉しそうに話す。

こう語る摘子さんに今まで感じられなかった摘子さん自身の存在の確かさのようなものを感じた。三人でいても自分一人が取り残されると言う不安もなくなったらしい。

会社での人間関係も改善されてきたことが推測され、面接の終わりをどうしていかを相談すると、「音楽が自分にとって何なのかを見極めないと自分が確立しないと思ふ、もう少しお付き合い下さい」と言う。

ここではっきりと、摘子さんにとってのテーマは自分

を確立するということとなったのである。

—私らしさの確立

チャーの世界とブッダの世界を私の中に—

二十一回に、「ひとつでも昔と変わらないものを持ち続けたい」、「それはロックを聞いて感動できる心」だと思ふ。「真髓のところを信じられ、人間の醜い所を知っていつつ、きれいなところを見たいと思ふ」と語った後、「お釈迦様のようにになりたい」と言う。こんなことを余りにもすつと言ったのに驚き、「何故思ったの？」と尋ねたところ、手塚治虫の「ブッダ」を21歳の時に読んで感激したこと。特に印象に残っている人物は、「ナラダッタ（生物の命を粗末にしたため、獣の心まで身を落として罪をあがないつづけた人）とアッサジ（熱を出して一度死後の世界に行き、その後予知能力を持った鼻たれの子。最後に生きのまま飢えた狼の子に自分を食べさせた。）」と言うや、摘子さんの目から涙があふれ出た。

母親の話をした時にも涙を流したことを思い出した。

私もこの漫画は読んだことがあったので、あふれ出る涙をこらえようとしている摘子さんを前に言い様のない感動を覚えた。

今回は、「とことん駄目になってみたい」、「会社もやめて親からも見放され、フーテンにでもなっさまよってみたい」、「本当はこんない子ちゃんじゃない」、「もっと汚ない部分がある」、「いい子ちゃんじゃない自分を發揮したい」と語る。

語られた言葉では表現しきれないような事柄が、「ブッダ」の内容とどこか重なりながら、摘子さんの内的作業が進行しているように感じられた。

二十三回には、「私のアウトサイダー的な部分がチャートとかブッダということではないか」、「私のアウトサイダー的なところがアウトサイダーでなくなりつつある」、「私のアウトサイダー的なものを求めて行くと、私らしさを求めていくことになるのではないか」、「これだと言う芯みたくないものがつかめればいい」と言うのだ。

そうして次の回。「ブッダ」の世界は、「人間はなんのために生きていくのかと言う永遠のテーマの世界」だ。

「ブッダ」を読んで、「そこに私の元があった」、「父と母が勝手に私を生んだのではない」、「自分がどうして生まれたのか答えを見つけたかった」と語った。

摘子さんには両親を超えた宇宙の根元とつながる必要があったのであろう。音楽もしかり。まさに摘子さんにとっての芯は、この核心だったのかもしれない。こうして摘子さんの自己確立の仕事は進んでいった。

そして「自分をよく見つめ」、「自分を知り」、「やって行きたいことをやり続けて行く」と、「類は類を呼ぶ」から、「合う人と出会って結婚もできるんじゃないか」と言う。

これを聞いて、四回に「花嫁になった夢を解消しなければ」と語ったことを思い出した。それがなかったように思われる。

二十五回では、「自分は善人なんですよ。もちろん悪い面も持っているけれど」と両面を捉えた発言がなされ

たり、「私の暗い面は大人のいい女のイメージにしていきたい」と語るようになった。

そういえば、黒を基調としたコーディネートしたり、最近の摘子さんの雰囲気は大人の女性を意識しているようにも思われた。

会社では責任ある地位についたということで会社の対人関係場面での自分のありようを再び問題にし、「気になるのは、会社にいる時の私というのがある、本当の自分と違うような気がする」ということであった。私は「社会的な役割をとっている時の摘子さんは、自分の内面に向かっていく時の摘子さんと違って当然だし、役割に必要なあり方をしているのだと思う。それは大事なことでではないか」と話した。ここで摘子さんは社会的な場にいる自分のありようにひとつの納得をしたように私には思われた。

そして二十六回が最終回となった。「チャーターを捨てられなかった自分がわかった」、「音楽を続けようと思いません。30歳過ぎてセミプロの音楽家になったら、『私はや

り続けた』と人に言えるでしょう」と語ったその態度は、きっぱりとしていた。

あれから二年あまりたったつい最近、彼女の歌がある小さなコンサートで聞くこととなった。客席の手拍子が私の耳にはやけに大きく聞こえた。後ろのバンドもなかなかだった。彼女は客席と一体となって歌いあげていた。スポットライトがあたってくっきりと浮かびあがった、ソバージュヘアに黒のスーツ姿の摘子さんの姿が鮮かに蘇る。

(このはな児童学研究所)

子どもの絵あれこれ（上）

川崎 千束

デパートをぶらついていたら、後から、

「先生」と飛びつかれて、驚いて見たら、中学三年生のU子ちゃん。そしていきなり、

「私ね、幼稚園の時に、先生に読んでもらった『なが、いな、がい、ペン、ギン、の話』大好きで、今でも何度も読みかえしているの」

母親と一緒にだったので、それきりで別れたのですが、私はほのぼのとうれしかったのが、今もなお胸うちに残っています。

昭和二十七年、私は三島市立西幼稚園の園長として、県学務課の依頼を受け、静岡県東部地区の研究大会を開催し、午前中は保育参観、午後は討議というスケジュールでした。

その午後の部で、小学校教諭から鋭い質問が出ました。

「幼児画には指導がないのか。ヒマワリと言って、貧弱な花を描いていたが、小学校ならその場合、大きなヒマワリの花を実感として捉えさせ、貧弱な表現をする生徒がいたら、ヒマワリの高さと背くらべをさせ、花の大きさと自分の顔とを見くらべさせる。」

この質問に対し、若い教諭に代わって私が次のように答えました。

「その子は、ヒマワリよりも空を、自分の空間の方を、大きく広く感じたのかも知れないし、ヒマワリと言っている、心の中の花を描いたのかも知れない。」

この場合は、それで有耶無耶におさまりましたものの、「幼児画には指導がないのか。」この言葉は尾を引いて、私の心に蟠わたかまりました。

翌二十八年、私は創設の家政大学附属幼稚園に移りました。当時の家政大には、山下俊郎先生をはじめ、心理学・教育学の先生方が揃っていらっしやいましたが、幼児画に就いての私の心の蟠りわたかまを解くには、私自身が保育実践の場で「木霊の峯」にたどりつくより他に道はありませんでした。

レニングラード就学前教育研究家集団著の「幼児描画指導書」の口絵に掲載されているソ連の幼児画の、多彩で、大胆な表現に心ひかれ、その本を熟読しました。はじめのことばに、

「幼児描画の自然成長論は彼等を慰めてはくれず、この子どもたちの絵の多くは、ふた

つの壁画の家と花を持った女の子というスタンプになり、男の子の絵は一年中、自動車と飛行機で埋められました。いったい子どもたちの思考や興味は、そんなに限られたものでしょうか。事件いっぱいの子どもの生活がたえまなく、子どもたちの意識の中に押し入ってきます。

自分の力と理解のかぎり、子どもたちはいき／＼とそれに反応し、自分の感情や思考を絵に表現しようとしますが、その為の能力は彼等にはありません。不満が次第に描画への興味を失わせ、無関心へ、ときにはあらゆる表現活動への憎悪へとみちびきます。

生活の観察による、芸術的発達と小さい子どもたちの力に応じたその表現手法を教えるための、もっともよい道を探すことです。

子どもたちの創造的な思考・イニシアティブ、ファンタジーの発達に全力をそそぎ、たて線、よこ線、かこみ線、これらの手法を利用して、いくつかの物の簡単なフォルムを描き出すことができます。これらの絵は各国幼児画審査員の賞を得ました。」と、あります。

右のソ連の描画指導の流れを汲む芸術教育研究所発行の各年令の実践記録も読み、夜の講義にも通いました。が、講義が進むにつれ疑問が頭をもたげてきました。

その手法は、モチベーションをしっかりとさせ、描こうとするものを観察、表現技法は

なるほどと感じながらも、寫生的な部分が多く、「全員の子が描けるようにする」が目的となっています。

。子どもたちの個性はどう考えられているのか。

。描きながら、子どもの気持の推移は、どう扱われるのか。

同じ頃、幼児画に深いかかわりを持たれている故木下繁先生は、

「幼児の絵の指導は、兎の耳は長いから、長く描きましよう、というのなら容易たやすいが、幼児が対象をどう捉えるか、大人がそれに共鳴する。そこが出発点である。尚描く技法よりも、まず色の美しさを感じさせる。」

木下先生は実際に、空缶に三・四色のポスターカラーを容れ数個小さい穴をあけたものを、広い部屋に敷かれた紙の上を、子ども達が自由にころがす。缶から色がこぼれ出て線となり、交錯する色の線が織りなす妖しきまでの美しさ。

紫式部日記は、中宮彰子の御出産の叙述ながら、近うさぶろう女房たちから参内する上達部・殿上人に至るまで、その服装と色合いを記しています。私はこれは紫式部の強気に依るものか、それとも想像か、と疑問を持ったことがありましたが、色を視点として源氏物語を見るなら、実に色彩ゆたかで、服装の色によってその人物が深く印象づけられます。

たとえば、紫の上は、紅梅のいと文浮きたるに葡萄染の御小桂うづきで、匂い立つ美しさが想像され、夕顔は白き袷にうす紫色のなよやかなるを重ね、であわれ深さがしのばれます。

家政大幼の三歳児たちが厭きずに遊んだものにハシャボン玉▽があり、それは円の輪郭の中に水を塗り、乾かぬうちに、ポスターカラーの三原色を、絵筆でポタリポタリたらずと、色が混り合って思わぬ美しさ（子どもたちの云うシャボン玉）が浮かび出ます。

私は、木下先生の幼児画の理念に傾斜し、心の蟠りが解けはじめました。折しも、アジア各国の幼児・児童の描画展が海外で催されて、その批評に、「日本の子どもたちの絵は技術は群を抜いているが、夢見るような情感に乏しい」とあり、ここに至り、私の目からうるこがとれました。

絵に固執して、何故四つに組んでいたのだろうか。

レニングラードの指導書のまえがきにも

「事件いっぱいの生活がたえまなく子どもたちの意識の中に押し入り。」

とあるように、いきいきとした多様な子どもたちの生活こそ、基本となるべきで、そのこととは自分はよくよく心得ていたものを。

私自身、年令と共にデリカシーが稀薄になって、子ども心に共鳴共感し、ということが文字の上だけで肯定してはなからうか。これは保育者として、致命的なかなしさです。

「子ども」ころの感情世界を、子どもの体験のままに描き出している、と漱石の絶讃。」
和辻哲郎も、「不思議なほどあざやかに子どもの世界が描かれ、大人の見た子どもの世界でもなければ、大人の子ども時代の記憶というごときものでもない、まさしく子どもの体験した子どもの世界である。」

二大家の絶讃される、中勘助の「銀の匙」を、文章の美しさ繊細さに酔いながら食べるように読みました。

——つづく——

(元東京家政大学附属幼稚園)



ことばを生きる体験 (二)

——意味の豊かさを求めて——

浜 口 順 子

〔ことばをしっくり理解する〕

以前オランダという小国に二年間滞在していた。帰国まであと数ヶ月となった頃、精神的にどこか不安定な状態が続ぎ、地に足がつかないような感じを自覚するようになった。しかしそれも、たまに日本人に会って何か話をする機会に恵まれると不思議に解消された。この変化を具体的な感覚で表現するならば、私の中にできていたすき間がみるみる埋まっていく感じだった。当時の私のオランダ語は日常会話ならば大体理解できるようになり、自分からも片言ながら意を通じさせることができる程度だった。オランダ人と話す場合、ききとれない時は言い直してもらうなどして理解していたのだが、意味はわかっていても理解していないような気分によくおそわれた。(片言の日本語を話せるオランダ人と話していても似た感覚は残った)。「言っていることはわかるが、本当

にそれを言おうとしているのか」と思ってしまうのだ。相手の顔の表情が話の内容と矛盾しているように思われたり、そもそも相手が私に対して肯定的な感情を抱いているのかどうかを読み取れなかったりすると、ことばそのものの意味が宙に浮き上がった。こうした「理解しきれない」感覚が日常化すると、私をとり囲んでいる世界がすぎ間だらけで、一つの意味ある全体として焦点のあった像を結ばないのだった。

日本という文化を共有している人々とはことばを交わすことで体験した「すぎ間が埋まる」感覚は、空白を満たすものとしての「反響」(ミンコフスキー)という聴覚的なメタファーを思い当たらせる。「……自己と環境はこの運動(注・反響)のなかで一体化し、一つの全体に融け合いながら、自己自身のうちに存在理由をもった閉じられた世界を形成している。」反響して相手とのすぎ間を充満するには、ことばに定着している記号的意味を理解するだけでは足りない。日本人の語ることはをしっかりと理解している気分になれるのは、相手の語り口につ

随した、いわばその地となつてゐる状況全体を含めて、ことばをダイナミックな生きた記号として読めるからである。つまりことばそのものの意味の他に、それが語られてゐる個別的状况(語る人の文化的背景や身体的表現など)が意味を語り出しているのであって、両者を複合的に理解してはじめて、人と人との関係が豊かに反響しあい「満ちる」ということができるのではないだろうか。この意味の重層性が「じっくり理解した」という充実感につながっているのである。

〔現実とイメージ・ジョンの間で〕

七歳のA男がテレビゲームのコントローラーに、どこかで拾ってきたらしい三角形の小さい木片をゼロハンテープで取り付けている。その光景を見た瞬間、私自身のある記憶がよみがえった。やはり小学校の低学年の頃だったと思う。近所の原っぱに一〇センチ四方ぐらいの厚ぼったい木切れが落ちていた。奥の方が少し斜め上がりになっていて、いかにも鉄人28号の正太郎少年が持って

いたコントローラーを直感させる形状だった。早速持って帰って、針金製のアンテナやギアを差し込んだり操作ボタンを書いたりした。私の空想の中ではもう巨大な鉄のロボットが眼前にぬっと立ち上がっていた。

A男は私の方を振り返って「これでパワーが大きくなるんだ」と、目を輝かして語る。私はその興奮がなんだかよくわかるような気がして「へえ、すごいね」と言った。その時だった。隣の台所で洗い物をしていた母親が少し苛立ちながら「バカみたいなことやめなさい。そんな変なものくっつけてもしょうがないでしょ」と水をさす。A男はそれには何も答えないで、じきにコントローラーから離れて別の部屋へ立ち去った。どういう脈絡があつて母親がそう言わざるをえなかったのか真意はつかみかねたが、私にはやはりそのことばがむごいものに聞こえ、A男を直視するのがつらい程だった。しかし当のA男にとっては起こるべくして起こった事なりゆきであつたのかもしれない。

ごっこ遊びの中で語られることばに、子どもは二重の

意味づけをしている。ことばという公共の道具を用いて「これでパワーが大きくなるんだ」などと語りかけてくるのは、自分の個人的な状況を相手に知らしめようとする行為である。つまりその時の自分の世界の意味が彼独自のものであつて、相手には知られていないという予想が前提となつている。しかしこれを聞いた方が真に受けて、「パワーが出る」ということばの内容を現実一致させようとすれば、「バカらしい」と感じてしまうよりほかないのである。逆にそのことばの語られている状況を共有して、A男の世界で透かしてそれを聴くならば、A男が現実とイマジネーションとを混同しないままに二重の意味を重ね合わせていることが見てとれるであろう。子どもがことばに込める意味の重層性、多層性に、大人側も想像力を駆使して目を開く用意があつていいのではないだろうか。

〔ことばのかたちに執着する〕

B男は養護学校に来るとき、新聞から切り取った全国

の週間天気予報表をいつも手に持っていた。そこには太陽・雲・傘をそれぞれ形どった晴れ・くもり・雨のマークが、都市名と曜日で縦横に仕切られた表の中に並んでいた。B男は校内のどこに移動するにもその紙切れを持ち歩き、遊びのあい間にふと手を休めて、その表にじつと見入るのだった。そばにいる先生はその様子を見て、「札幌はあした晴れ時々もりでしょう」などと表中の記号通りにことばにしてみることが多かった。B男自身も、テレビの天気予報官が語るような口振りを機械的な響きでひとりごちていることが見受けられた。

B男は人と直接コミュニケーションをもつためのことばを口にするとはなかったが、「○○チョコレートしんはつばい、おいしいよ」というようなテレビコマーションのキャッチフレーズを歯切れのよい口調で声に出すことをよくした。また、いろいろな銀行の名前を挙げて先生に書かせ、書き上がった紙を壁に貼らせて、満足気にながめていることもあった。雑誌やカタログのページを繰ってはふと手を止めて、ページの端の方にある商標

をしつと見入っているのもよく目にした。

天気予報のマーク、コマーションのコピー、銀行名（おそらく街頭のビルの壁面に立ち並ぶ「……銀行」という看板の印象が焼きついているのであろう）、商標などは、どれも私たちのまわりにある世界に発光して視覚に突きささってくる記号である。B男にとってこれらの記号がなぜ注目されるのか。付随して思い出されるのは、彼の儀式的ともいえる行動である。帰宅時間が迫ると、きまつてある教室の入口付近に上ばきを注意深くそろえて脱ぐのだった。彼の学校生活全体を見てもいくつかの遊び（行動）パターンを反復する傾向が強く、たとえば二つの台の間かけ渡したはしごの遊具がホールに出ていないと、執拗にそれを出せと身ぶりで先生に要求し、さもないと他の活動が始められないようだった。

B男の世界が記号やパターンなどの「形式」に支えられて安定を確立しているのだという考え方もあるだろう。しかしB男を見ていて、こうした諸形式が彼に心地よい安定を与えているようには見えなかった。むしろ形

式を介して何かを模索しているのではないかと思われる。私たちがコマージュの文句や商標に殊更とらわれないのは、その形式と内容を自然に調和させて受けとめられているからであろう。それに比べてB男の語る「アシタハニツチュウヨクハレマスガヤカンカラクモガオオクナルデショウ」という音声は、内容（記号的意味）から一時解放されて、形式そのものとして戯れられているように聞こえた。

人が記号としてのことばを習得し使い慣らしていく過程で、ことばの意味（内容）の可塑性は貧困になり、多様性を失い、そのかわりに記号的機能をより正確に果たすようになる。つまりある記号が一定の意味にしか対応しなくなるのが、人間の築いてきた記号文化（ことば社会）の望ましい方向性なのである。さもないと情報は混乱し、たしかに意思疎通は困難になるだろう。しかし、大人には帽子にしか見えなかった絵が、星の王子様にとっては象を飲み込んだウワバミを意味していたように、記号の一元的意味以前にある多様な発生的意味が、人間

という非合理的な存在の深部でいつも脈打っていることを忘れてはならないのではないだろうか。

B男を見ていると、記号の外側（形式）と内面（意味）とを直結させている鎖を一時解き放して、B男自身の主体的な意味づけ（B男の身体性）を記号の内面に回復しようとしているようにも思われてくる。古来人間が「表現と内容の一体性の確立」を模索してきた姿を連想させもする。いわば「コトバのデジタル性」（丸山）を一時否定してことばを生きることによって、自己表現を十全になしうる手段を獲得しようとしているかのようでもある。これはB男の主観的な世界の解釈というよりも、むしろB男の世界を媒介にして、人間一般のことばとの永遠に続く葛藤を透視しているのかもしれない。

〔同じことばを投げ返す〕

オランダのユトレヒト大学教育学研究所で、Hというダウン症の女の子（当時一〇歳）のプレイセラピーに参加したことがある。学校でまわりの子と仲良くなれな

いというのが両親の主訴であった。遊び相手の子どもにも「……しろ」というような命令的なことばしかかけられないので、遊びが長続きせず、相手に立ち去られてしまうという。実際にそうした場面は私自身も観察した。反面、愛着を感じた大人には度を越した甘え方を示し、両親との面談中、研究所の教授の顔をなめてくる程であっ

た。対人的な距離感、社会的関係が育っていないように見受けられた。プレイルームで週に一度約一時間、私と一緒に遊ぶようになったが、私のオランダ語会話能力の限界が考慮され、まずはHのかたわらに立つてなるべく行動を模倣していくようにと大学の相談チームから指示された。極端に不自然にならない程度にHの言動をま



ねすることになる。H：「名前は何？」私：「名前は何か？」これが数回繰り返されるところから始まった。H：「ここにあなたの名前を書きなさい」私：「あなたも書いてね」——何を言ってもこだまのように同じことばが返ってくる状況はHに奇妙な印象を抱かせたと思う。

セラピーの経過をここで詳述してられないが、六回目の日にひとつの画期的な変化が起こった。H：「はさみはどこ？」私：「はさみはどこかな」H：「じゃあ一緒に探しに行こう」——命令的なことばによって上下関係を押しつけてきていたHが、私と同じ目の高さまで下りてきてくれたような気がした。この劇的ともいえる変化の序章として、名前を書く遊びに見られたエピソードを紹介しておきたい。Hは毎回ホワイトボードに私たち二人の名前(HANNEKE、JUNKO)を書いていて、四回目のセラピーの時、一文字一文字をゆっくりと私の名前をつづった末、なぜか「M」の文字を付け加えた。「JUNKOM」——オランダ語の動詞「来る」kommenの命令形komが私の名前の末尾に重なって、

「ジュンコ、来て」(Junko, kom!)と私に呼びかけているかのようにだった。その次の回(第五回)には「JUNNEKE」という二人の名前の融合形をHが(おそらく自分では気づかないうちに)書いた。「来て」と私を呼び招き、さらには名前を融合させることで、命令的な言語関係では近づきえない二人の間の距離を狭めていき、「一緒に」何かをできるといふ全く新しい関係をH自身が見つけ出したといえるだろう。

命令的なことばを投げかけられて、それに服従したり反抗したり「そんなクチをきいてはいけません」とたしなめたりしても、命令的な言語が作り出す人間関係の性質を一新するのには功を奏さなかったであろう。なりゆきはどうなるかわからなくても、命令をそのまま同じことばで投げ返してみる。するとその場の状況はまずは奇妙な色彩を帯びて、一方の人が「命令」で作り上げようとしていた関係性の基盤が危うくなる。そして関係の意味が生じる発祥地へと二人を引き戻す。そもそも命令として語られたことばの意味が解体する現象が、同じこと

ばの投げ返しによって生じているのである。

心理療法の技法を例に出すまでもなく、日常生活の中でも返答に窮すると同じことばを投げ返すことはめずらしくない。「どうしたらいいのかしら」と相談を持ちかけられて、「どうしたらいいのかしらねえ」とことばを繰り返すだけでも、案外、相手は心なぐさめられるものである。投げかけられたことばの意味を真向から受けとめて、「私はこう思う」とか「うまく答えられない」などと返答するばかりが、人と人との関係を育てるものではない。ことばの意味をひとまず二人の間に漂わせて、その中で二人が振動しあう。そして状況の意味が位相変換するのを待つ。こんなことばとの関わり方もあると思う。

有能な情報（意味）伝達機能を發揮していることばの周辺に、あいまいに、多様に、状況に即応してことばを生きる人とことばとの関係があることをいくつかの側面から見てきた。文化としてのことばはもとより大人の独

占物ではない。子どもがことばをわがものとしていく過程で、ことばを生きて、ことばに込められ得る多様で重厚な意味を体験すること——これが意味豊かな人と人のつながりにも通ずるのだと思う。

△文献▽

E・ミンコフスキー著、中村雄二郎・松本小四郎訳「精神のコスモロジーへ」人文書院、一九八三

丸山圭三郎「コトバの身体性と二つのゲシュタルト」『思想』第六九八号（一九八二、八月号）岩波書店

（お茶の水女子大学）

子どもにとって楽しい
音楽リズムのあり方を考える (3)

原口 純子

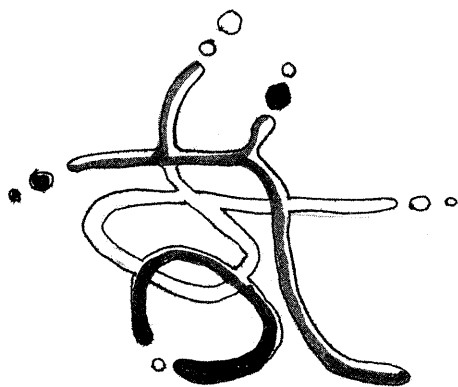
3、わらべうた

(1) 種類と傾向

今日幼稚園で用いられているわらべうたは、次の三つの流れがある。

(ア) 古来、日本で伝統的に歌いつがれていて、保育者自身が子どものころからなじんできたもの。(例・かごめかごめ・花いちもんめ)

(イ) コダーイ芸術研究所によるコダーイシステムのわらべ



うた。(例・どんどんばし・つるつる・ひもろ)

(ウ) ヨーロッパからはいったわらべうた。(例・ロンドン橋・キャベツを植えよう等)

保育の中で使用頻度の最も多いのが、伝統的わらべうたである。四月から三月までおこなわれる。コダーイシステムのわらべうたも三年間研修を受けてみたが、同じ日本のわらべうたでありながらどうしても身につかず、自分のものとして使い切れなかった。わらべうたは譜を見ず耳だけをたよりにおぼえるため、大人になって習ったものは身につくかと思われる。ヨーロッパから入ったわらべうた、例えばロンドン橋などは、保育者自身子どもの時代からなじんでいること、又新しいものは楽譜を見て練習できる点でかえって身につけやすいとも言える。

(2) 事例と考察

事例9の1 わらべうた「かごめかごめ」の発達に見られる変化 年少 4月

なにも遊ぶものが見つからず不安そうな女兒三人を

さそって手をつなぐ、それを見ていた女兒三人がよって来たがなかなか知らない人と手をつなげずにいる。そこで教師が言葉がけをして手をつなぐようにうながす。手をつなぐことによって不安そうだった表情が安定した。手をにぎり返したり、顔を見合せたりの動作が見られる。「かごめかごめ」を教師が歌うと丸くなくて手をつないで歩くことができる。「うしろの正面だあれ」になると友だちの名前を知らないで困ってしまう。うしろに当たった子どもは名前を呼ばれるのを待っている。教師が助けて次の鬼を決めてまた始まる。

△考察▽

1、入園当初の不安定な時期は、教師や友だちと手をつなぎ、わらべうたのリズムに合わせて歌ったり、歩いたりするだけで十分楽しく、「みんなと一緒」という安定感が生まれたり、友だちに興味を持つきっかけになる。

2、四月五月の友だちの名前もよく知らないうちの「か

「ごめかごめ」は鬼が交代できるような教師の助言や配慮が必要である。ルールを変えて目をあけて、他の人にタッチして交代する方法でもよい。

事例9の2 わらべうた「かごめかごめ」の発達に見られる変化 年少 9月

気の合った女兒六人が集まって園庭で「かごめ」を始める。「うしろの正面だあれ」では声だけで友だちの名前を当てることができる。遊びを自分たちで変形させて、「うしろの正面だあれ」のところで鬼がまたの下から頭を下げて友だちのくつを見て名前を当てるゲームにして遊んでいる。

△考察▽ 四月の段階では、友だちと手をつないで歩くだけでうれしかったのが、九月では、友だちの声を聞いてあてることがおもしろくなり、「かごめ」の楽しさの質が変わってきている。

事例10 わらべうたのおもしろさ 「あぶくたったにえ たった」 年長 11月

七人の女兒が園庭で「あぶくたった」をしている。

「あーぶくたったにえ たった、にえ たかどうだか食べてみよムシャムシャ もう煮えた、戸棚にしまつて鍵をかけて、ガチャガチャ」：「トントントン」「何の音?」「ブランコのゆれた音」「あーよかった」：「おぼけの音」キーンツ逃げる、鬼は友だちを追いかけて、つかまえて鬼交代をして何度もくり返す。

△考察▽

1、年少から年長まで季節を問わずくり返される遊びである。この遊びが好まれるのは、日常生活に合った歌と動作の楽しさである。歯をみがいてシュッシュジュ オおふろに入ってゴシゴシゴシといった動作がリズムカルで、又それぞれに自分のイメージをもって動ける。みんなが知っていて安心して参加できる遊びである。

2、かけ合いのおもしろさ。鬼と子どもとの歌のかけ合いのおもしろさがある。

3、「トントントン」「何の音?」のところで鬼になった子どもは自分で考えて「赤ちゃんの泣く音」とか「木

の葉のゆれる音」など考えたり、工夫する余地のあることが、この遊びを一層たのしいものにしてしている。

4、ゲームとしての要素。おにごっこになっているため、走る、追いかける、にげる、などのゲームとしてのおもしろさがある。しかし鬼になりたくてうろうろとにげない子どもが次第にでてくるために、年少時に於ては教師が介在して指導する必要がある。

事例11 ごっこの中にとり込まれるわらべうた 「だいくさんのかなづち」(注3) 年少 11月

男児七人が家族ごっこで、大きなダンボールを用いて家づくりをして遊んでいる。一軒建つごとに「だいくさんのかなづち」を歌い、お祝いをする。ねこの家が建った時は普通に歌っていたが、ベガサスの家が建った時は急に速度を早めて歌ったり「四つのかなづちでやろう！」とかなづちの本数を増やしている。おなか、おしり、背中などをかなづちにして遊んでいる。

△考察▽ 西洋わらべうたのグループであるが、メロディーが単純でおぼえやすく、自分の体の腕や足、ひ

ざ、鼻などをかなづちにして「トントン」とするところがおもしろく好まれている。ごく普通のごっこ遊びの中にとりいれられて、自発的に歌ったり動作している。

歌、動作、遊戯、ゲーム、表現、ことは遊び、等々さまざまな要素が入ったわらべうたは、子どもにとって最も自然で自由に楽しめる活動である。

4 手あそび

(1) 種類と傾向

手あそびといわれるものの中にも指あそび(例 チビチャン・デカチャン、10人のインディアン)に属するものと腕から上半身を使う遊び(例 お弁当箱のうた、げんこつ山、小さな畑、むすんでひらいて、チュアリーッブ)とがある。

手あそびは一年を通じて、主として集合した保育の場で教師主導におこなわれる場合が多い。教師と子どもが対面してピアノを用いず、生の声で歌いかけ、手を動か

しながら、子どもの表情を見ることができると、子どもを教師の方に注目させるには便利な方法である。手あそび歌が、他のわらべうたとなるのは、場を移動しないこと、立ったまま、又は、すわったまま手や体を動かして歌いながら動作するところにある。

(2) 事例と考察

事例12 四月入園当初の手あそび 「むすんでひらいて」 年少 4月

降園の前30分 イスを丸く置き、全員の顔が見えるようにすわり、教師も輪の中に入りイスにかける。教師は子どもの顔を見ながら「むすんでひらいて」を手をうごかしながら歌う、子どもたちもいっしょに歌いながら手を打ったり、開いたり動作をつけている。

△考察▽ 子どもにとってはいっしょとして動かずに歌うよりは手を動かしながら歌う方が楽しくうたえる。四月に歌っているのはこの他に「手をたたきましょ」「チューリップ」等手あそびがいっしょになっている歌が多いことに気づく、実態に合わせて自ずからそのよう

に計画されていることがわかる。

事例13 子どもの注意を教師にひきつける 「いちじくにんじん」(注4) 年少 10月

クラスの子ども全員を集合させて、次に教師が話しを始めようとする時、子ども同士でガヤガヤと勝手におしゃべりをしている。教師が子どもの方に向かってごく普通の声で、「いちじくにんじん……」と歌いながら動作を始めると、しだいに教師の声に気づいて自然に静かになり、子どもも手あそびを始める。教師は子どもに「静かに」と言わず、言葉をはっきり発音しながらリズムカルに歌う。

△考察▽ 子どもが教師の指示により意図的に集合している場面で、かなりうるさい状況にあっても、教師が子どもの前に立って、手あそびを始めると、たいていの場合子どもはしだいに静まり、教師のペースのつて歌ったり遊んだりし始める。従って手あそびは、子どもの注目や集中を集める手段としては、非常に有効である。しかしこのことが逆に、子どもが興味もない

活動に、教師が一方的に子どもを強引に引きつけるための手段として用いられるケースも多い。

手あそびは、教師主導型の保育の中で用いられることが多く、子ども同士が子どもだけで手あそびをたのしむということは少ない。ほとんど何の道具もなしに、歌いながら、手や体を使って遊べるということは、その事自体とてきなことである。目的の手段や道具としてでなく、もっと自由な遊びの中で、少

人数の子どもの中で、先生といっしょに手あそびをして遊んでよいのではないか。

子どもに「静かにしなさい!!」とか「お話しやめ!!」「お口にチャック!!」などというよりは、おだやかにうたいながら、自然に気持が集中するやり方も、子どもの心の流れにそったものとも言える。手あそびは幼稚園的な活動である。

(注3)「だいくさんのかなづち」 世界のあそび歌40 音楽の友社

(注4)「こどもたちへのおくりもの」 うたあそび、第1集 日本レク協会 遊戯社

——つづく——
(つくば市立桜南幼稚園)

自立——かかわりの中で——

はるにれの会

野 島 順 子

学校は、子どもにとってひとつの社会である。幼稚園、あるいは保育所、小学校に通う中で子ども達は、より広い社会に向かい多様な意味での自立の過程を辿るのである。

一年生の担任をし、子ども達の初歩的な自立の過程に立ち会った。そしてその中で、その子その子が自立していくために、友達同志のかかわりがいかに大きな影響を与えているか、ということを改めて感じさせられた。

もちろん学校は学ぶところであるから、教師が子どもに、「教える」ことに費す時間は圧倒的に多い。子どもが学校ですごす場と時間の多くは、こちらの意図のもとにある。が、子ども達がこちらの意図を越え、与えられた場と時間の間隙をぬって、時にはけんかもし、時にはきびしいやりとりをしながら、確かに育ち合っていく姿にふれ、はっとさせられたことも多かった。

いろいろな個性をもった友だちがいて、いろいろなかわりをもって大きくなってほしい。そんな願いにも似た思いを持ち続け、ピカピカの一年生との一年間をすご

してきた。

三十人三十様の強烈な個性をもったクラスであった。

その中に、Aちゃん——幼児期の大手術のあと、ことばがはつきりとしやべれなくなり、咀嚼や指先の機能が多少思うようにならない、がいつもニコニコ笑顔を絶やさずやる気充分の女の子——がいる。ここでは、クラスの中でのAをめぐるあれこれの中で、心に残るいくつかの場面を、私の対応も含め考察したいと思う。

「ジャンパー、わすれてるよ」

入学して一週間。学校生活の一通りの約束事を覚えつつある頃のことである。持ち物も増え、学校に置いておくものは、たとえば、道具箱、算数セット、粘土は、ロッカーの下端に、ぞうり袋、体操着、ジャンパーは廊下の物かけに、台ふきは机の脇に、という具合にそれぞれ分散収納する。三十人とは昔に比べれば少ない人数のようだが、それでもひとつの教室にこれだけの学校生活必需品を置き、その間を、スピード感あふれる元気一杯の

子ども達が動いている。ちょっと整理が雑然としてくると、「なくなっちゃった」「だれかのとまちがえちゃった」に始まって、怪我につながるトラブルも起こしかねない。子ども達も、「いざお勉強」とランドセルをしょって勇んで学校に来たものの、入学してしばらくは、こんなことも含めた集団生活の基本的なルールを覚えるのが、「お勉強」の第一歩なのだ知らされる。

一日のおわりのひと仕事、「おかえりのしたく」

「お手紙は、四つにたたんで連絡帳の袋にしまつて」

「トイレにいきたい人は、どうぞ」

「上着を廊下にかけてある人は、わすれないで…」

等々、最後の指示をする。子ども達は一斉に、真剣な表情までする子もいて、自分のやるべきことをやるべく動き出す。これがもう少し時がたつと、トイレに行きながら廊下で帰ってからの遊ぶ約束をする子がいたり、ロッカーの前でプロレスごっこをしたり、動きの中に「遊び」が入ってきて、なかなか「さようなら」にこぎつけ

なくなるのだが、このころの一年生は、まだまだ言うことをよく聞く「いい子」の面持ちである。

皆より、少しやることは遅くなってしまふけれど、言われたことにひとつひとつ肯きながら聞き入り、自分のペースで確実にやり通していこうとするAが、廊下での用事を済ませ教室の入口のところで立ち止まっている。部屋にいる誰かに向かって声を出して手まねきをし、次に廊下の方を指さしているのである。言われた子はしばらくして気がつき、「あそうだ。」というふうにしてあわてて廊下に出ている。つまり「○○ちゃん、ジャンパー」とりにいくのわすれているよ。」ということだったのだ。

帰りの仕度のにぎわいの中での、一瞬の小さな出来事だった。だがその一瞬の光景が心にひっかかった。そしてそれは、やや大げさに言えば、Aを受けとめる私の姿勢が問われる出来事だったのだという思いに至る。入学当初、Aのお母さんにも、三十人の中のひとりとしてみていきたい。それ以上の扱いはできないししたくない。

というようなことを伝えたつもりだった。Aもみんなもそれぞれが長所短所をかかえた、そして成長しつづけている子ども達である。Aひとりを特別扱いすることはやめよう。と自分も心づもりしていたつもりだった。が、そうした頭の中で考えていたことの、意識化されたことの奥の部分では、Aには、他の子より手をかけてあげなければいけないし、他の子に助けってもらい、側だけの存在として、特別視していたこと。そのことが、この光景にふれ、明るみに出されたのだ、と気づく。

その時以来、Aを見る目が少しはクリアになったと思う。Aは、けっこう世話好きで、そうじや給食の当番の仕事にも意欲を示し、積極的に周囲とかかわりを求めつついていくタイプなのだということがわかってきた。

「チーズバーガー たべられない」

クラスの子ども達に、Aのことを初めからあまり詳しく説明することはしなかった。入学当初、ひとりひとり名前を呼んで、「ハイ」と返事をしてもらう時間のAの

番になった時に、「あまりスラスラおしゃべりできないんだよ。」というくらいに簡単に話しておいた。子ども達のストレートな出会いを大切にしかかったし、しなやかな心を持つ子ども達に、かわり方の押しつけになるようなサジェスチョンは、できるだけ避けたかった。Aとのやりとりの実際の場面で、私が一緒に立ち合える範囲で、よりよい友人関係になっていくためのかわり方を一緒に考えていこう、そんなふうに思っていた。

給食が始まった五月のある日のこと。Aがいきなり大声で泣き出す。まわりの友だちが見兼ねて、「どおしたの、どしたの……」と集まってくる。そこでの質問とAの肯きからわかったことは、「チーズバーガーがたべられない。」ということだったらしい。

「あら、そうなの。」と私は、聞きはなしておく。すると、その後、四〇五人の友だちがAに言葉をかけ励まし、おそくまでかかってAがチーズバーガーを食べすむことにかかわっていた。

次の日の朝、その時のことを、「やさしくしてあげた

んだよ。」という具合にクラスのみんなに話した。みんなの前である子たちをほめたのは、初めてだった。Aへのかかわり方の実際の場面について紹介したのも、初めてだった。みんなは、おしゃべりひとつせず、これまた真剣な表情で聞いていた。あゝ、こういう話は、敏感に受けとめる子ども達なのだ、その時思った。

そしてその日の給食である。今度は十人ほどの友達がAのまわりをとりまいている。ある子は言葉をかける。ある子はよくれた口のまわりを、ティッシュを出してふいてくれたりもしている。その光景をみていると、それぞれがとも熱心にAのことを世話しているというふうでもなく、Aがごちそうさまをするまでの長い時間、ちよつとフラフラとよそへ行つてまたもどつてきてのぞきこんでいる子あり、私のところへAの様子を知らせに来てくれる子あり、という具合に動いている。その固まりそのものがひとつの“遊び”の様相を呈していた。だからそれは、見ている限りちよつとほほえましくステキな光景だったのだけれど、ティッシュで口をふいてくれ

たりすることまでしてくれるのをみていると、昨日、あえてみんなの前で言ったことが言いすぎだったのかなと思ってしまう。あえて言えば、こうしたことが高じると、かえってAの自立の妨げになってしまうのではないかと。が、考えすぎの私の前を子ども達はさっさと通りぬけ、彼らがAへのこのような行きすぎたかかわりをくり返す場面を、私はその後見ていない。

「えらいねー」

Aは、とにかく粘り強く机に向かってる。文字や文の視写など、時間はかかるが彼女の根気とやる気で着実に力をつけている。しかしながら、ことばをはっきりしゃべれないということは、やはりハンディではある。学習面だけでも、私のAへの手だてについて、力の足りないゆえの反省点は多い。たとえば、テストなどの問題文を私が声を出して読んであげると理解できることがよくあった。聞いて理解する力は充分にありながら、自分の声でその経験を積み重ねることができないため、なかなか

か読解力が身につけにくいのだろう。もっと彼女の声かわりになる機会を多くもてばよかった――。

一学期の中ごろ。国語の、その日二枚か三枚目のプリントを前に、Aがボヤーとしている。同じバタンの内容なので私もつい

「みんなだつてがんばっているんだから、Aちゃんもはやくやりなさい！」

と強い調子で言う。とAは大声で「ウェーン」と泣き出した。私はその大きな声に、ビビる気持ちをかくすこともあって、さらにAに向かって、

「みんなのじまになるから廊下で泣きなさい！」

と追いうちをかける。するとAはビタツと泣きやんだ。さすがにまわりの子ども達もしんとしている。そこへいつも元気すぎるほど元気なB君、すかさず

「Aちゃん、えらいねー。」と、Aが泣きやんだことをほめてくれたのである。その後Aは、私の

「もうあとはおうちでやる？」の問いに首を横にふり、プリントにとりついたのであった。

一つのプリントを仕上げるのに、Aは友達の何倍ものエネルギーを費すのだから。だから二枚、三枚と続くと、集中力・体力ともにやはりしんどくなるのだろう。

それでも、最後にAをプリントに向かわせたものは、Bのやさしさのこもったひと言だったに違いない。そして私もまた、彼のひと言に救われた。さらに言えば、そんな言葉を発するBに出会い、普段いはずら坊主でしかることも多いBを、見直すきっかけにもなったのである。

「ひとりて できるんだから」

まわりの友達のAへのかかわりの行きすぎは、もうくり返さず今日までできている、とは前述したことである。それは、Aはいろいろなことが出来るということをみんながわかってきたこともあるし、またそれぞれが、学校生活に慣れ、興味が外へ外へと拡がっていつていることもある。それでも中には、Aのことを気にかけて、Aの気持ちをよくわかってくれる女の子の友達がわずかではあるがいてくれて、心強い。

給食当番のAの帽子が後ろ前になっている。給食ももらいに来た子がそれに気付कि、なおしてあげようとする
と、

「Aちゃんは赤ちゃんじゃないんだからね。」

「とお姉さんっぽく言ってくれたのはC子。C自身が、ひとりっ子の甘えん坊で、些細なことでメソメソすることもよくあった。それでも、そういう自分に甘んじているのがいやなんだなと思わせる様子が伺われている。不覚の涙がこぼれる時は、ハンカチをとり出し下を向いてあわててふいたりするいじらしい姿も目にする。だからかどうかわからないが、Aの自立の過程がCにはよく見えるのかもしれない。CにとってAの自立は、自分自身の自立と二重写しになっているのかもしれない。

三学期の最後の大そうじの日。もうお勉強することもないし、大そうじの合い間にちょっと外で遊ぼうということになる。

「その前にげた箱にはってあるビニールテープの名札をはがしてね。」

と楽しいことの前に、ひとつの仕事をもみんなに言いつける。なにしろ、新しい二年生になる君たちの使ったものは、ゼーんぶ新しい一年生が、みんながそうだったようにとても新鮮な気持ちで使うのだから、どれもこれもみんなきれいにしておかなければならないのです。——こんな話をして始めた大そうじだった。女の子たちの半数近くがさっそく、

「だんだんとび（とか言つて、昔我々がよくやったゴム段のような遊びを短いなわとびですること）するものこのゆびとーまれ！」

と人集めをしている。その中心人物にAの仲よしもいてAも加わる。Aはなわとびの一端をもってそのグループと一緒にげた箱まで行く。そしてなわとびを片手にしっかりと握り、片手で名札をひっかきはがそうとする。他の子はさっさとはがし、くつをはきかえて外に出ようと、なわとびのもう片方の端を引っぱっているのだが、Aがまだげた箱にとどまっただけで、なわはその間にびんとはられた状態になる。そこへ、いつも穏やかにAに声かけ

してくれるD子ちゃんがAのところへ寄ってきて、はがすを手伝おうとする。するとまたまたCの声。Dに向かって

「Aちゃんはひとりでできるよ。」そして、Aに向かっては「Aちゃん、なわとびはなして、名札とつたらなわとびに入れてあげるから。」

となわを引っぱりながら言うのである。その台詞は、日常的にAと遊んでいない、たとえば私のような立場の者が言えは、やゝ冷たく聞こえるものだったろうが、そこはそれ子ども同志のこと、時にはきびしいのも子どもの世界では常なのだろう。それでも私は、「つめたいんだからね」などと独りごちながら、Aがはがすのを手伝ってしまったのだった。

こんなことがあって、一年生との一年間はあっという間に過ぎていった。

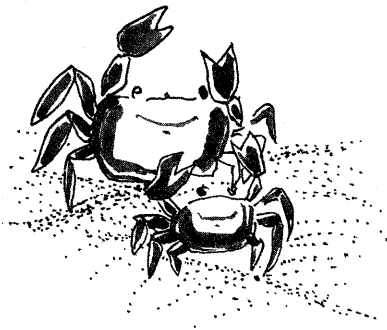
Aの自立は、文字通りまわりの級友たちに支えられていた。一方、Aの自立を支えている彼らもまた、支える

という動きそのものが彼らの内部で自立をすすめていく上での、大きな力となっているのである。そう考えていくと、Aが彼らに支えられる、彼らがAを支える、といった一方的な関係はなく、まさに対等に、支え合い、助け合い、育ち合っていく関係にあると言えるのではないだろうか。

もちろん、私の目の届く範囲に限っても、Aをめぐる友達のやりとりは、必ずしもステキだと思えることばかりではなかった。また、関係がとぎれ、授業中や遊び時間、Aがぼつんととり残されている姿にも、幾度となく

出会った。それらは、個人の力の及ばなさ、足らなさに依るところも多い。また、三十人からの多様な子ども集団に、たったひとりで立ち向かうことで成り立っている、今の現場の限界にも当然ぶち当たる。そして子ども達はまた、学校で家庭でやる事が多くとても忙しい。多くの問題は残されている。

しかし、彼らがまた、新たな出会いの中で成長し、自立していく関係が開発されていくことは、共に過ごす場が保障されていけば可能なのだとも思うのである。



さあ、いよいよ夏休みです。

今日は、特集として、六人の先生方に本の紹介をしていただきました。日頃の忙しさから一息ついて、緑の木陰で、心ゆったりと読書を楽しんで下さい。

娘の学校の宿題に、新聞記事の中から話題をとり上げ発表する、という課題が出されました。娘は、以前から興味があった、フロンガスの問題をとり上げて発表したそうです。同じ頃、テレビでも地球の汚染の問題としてフロンをとり上げた番組があり、家族で興味深く見ました。私たちの身のまわりには、フロンがたくさん使われています。四年生の娘の頭では、まず身近かなところから質問・疑問……。

——うちの自動車、廃車にしたけれど、フロンでたかな？ クーラーに入れてなかったから、大丈夫だね。ひとまず安心。

——お母さん、棚の上に、使っていないスプレー缶がたくさんあるけれど、あ

れどうするの？ まさか使うんじゃないでしょうね。それとも捨てるの？ 捨て

たらフロンが出るのに！ でも、とっておいたらどうなるの？ いつまでとっておくの？

環境問題は、まず素朴な疑問から。

棚の上に目をやると、ゴキブリ殺虫剤、つや出しスプレー、ねこよけ匂いスプレー、など数缶が並んでいます。

昔の殺虫剤は、噴霧式の手おしポンプでした。スプレー缶になって、片手でシュー。便利になった分だけ、こわいおつりがきたということなのでしょう。

私は娘の質問に答えなければならぬのです。でも……使うのをやめよう、というところまではわかるのですが……？？解決方法がわかりません。

今も、我が家の棚の上には、地球規模の大問題が、無雑作に並んでいます。

暑い夏、お身体を大切に、ごゆっくりお過ごし下さい。

(K)

幼児の教育 第八十八巻 第八号

八月号 ©

定価 四一〇円（本体三九八円）

平成元年 七月二十五日 印刷

平成元年 八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

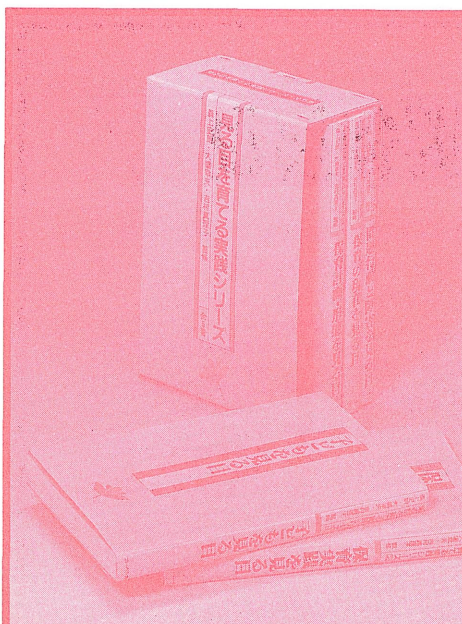
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二一七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館 にお願ひいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。



編著

森上 史朗 (日本女子大学教授)

大場 幸夫 (大妻女子大学教授)

吉村真理子 (松山東雲短期大学教授)

保育の本質をしっかりと把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

見る目を育てる実践シリーズ

一巻「子どもを見る目」

二巻「保育実践を見る目」

三巻「保育計画・形態を見る目」

四巻「保育の現在を見る目」

五巻「問題行動と障害を見る目」

全5巻

A5判・平均228ページ

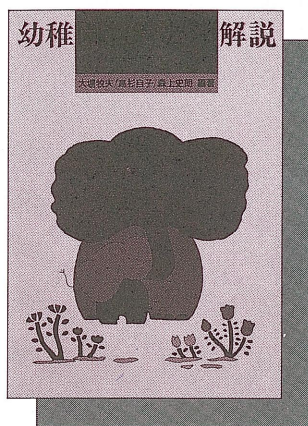
定価各1,751円(本体各1,700円)・セット定価8,755円(本体8,500円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼稚園教育要領解説



教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

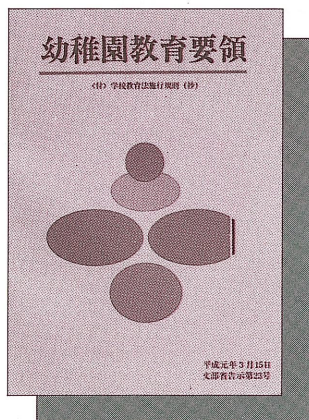
目次から
第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
第2章 どんなふうに変わるのか —考え方の基本—
第3章 幼稚園教育の内容
第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
付録 「幼稚園教育要領」全文

大場牧夫・高杉自子・森上史朗 共編著

A5判・270頁・定価1,200円（本体1,165円）

〈付〉学校教育法施行規則（抄）

幼稚園教育要領



文部省告示「幼稚園教育要領」改訂版で、幼稚園教育の基本的な精神が示されたもの。実施日は平成2年4月より

幼稚園から高校まで同時改訂公表され、教育のはじめは幼稚園からと幼稚園教育が位置づけられた。改訂版は遊びを通して人や自然と関わる力を培い子どもの発達に即した教育の必要が示された。人間として生きるための幼児期の教育内容が明らかになり、教育哲学が確立されたこと。保育関係者必携の書である。

A5判・16頁・定価100円（本体97円）